

〈原著論文〉

人間福祉学の科学的宗教へ向かう展開 [第1部]

——軸芯に位置づく福祉——

牛 津 信 忠

抄 録

まず、宗教について科学的視点に照らしながら概括的な議論をする。それを基礎に、最先端科学と有機的関連を持つ宗教ないし科学的宗教という概念によって宗教を再把握する。その上で、人間福祉の議論における所与ないし道標とされる無限の可能性へと導く歩みの方途について探求の端緒を見出してゆく。われわれは有機態の哲学の立場を保持するホワイトヘッドの宗教思想に沿って議論を進めていく。

キーワード：科学的宗教、ベクトル性、現実的實在、抱握、生活構造

第一章 科学的宗教の要としてある人間福祉学

- 1 科学的宗教と人間福祉
- 2 現代における科学の最先端：「モノ」から「コト」への道
- 3 量子力学の現在：情報理論における「コト」の世界
- 4 高度情報化社会のなかの福祉の状態把握
 - ① 高度情報化・管理社会化の元にある個的存在
 - ② 福祉の実質におけるベクトル性を問う
- 5 ミクロ世界から展望するマクロの世界

第二章 科学的宗教を土台に人間福祉を考える

- 1 人間福祉から見る自我存在の福祉：見える、把握することの出来る福祉
- 2 生活構造の確立を自我及び人格形成の土台にする
- 3 人格主体の相互形成の実際：相互的人格主義
- 4 エンパワーからリカバリーへ向かうプロセス
 - ① エンパワメント、ストレングスからの道

以下論叢次号に part II として掲載予定

②リカバリィへの帰着

③インクルージョンということ

④人格主体へのリカバリィ

5 人格主体の高揚から幸福主義まで

6 人格主体の透明性と継続的抱握

第三章 宗教性の根幹主体は人間存在の存立根拠となる

1 人間の人格における主体と神の存在

2 人格主体と神を関係づける霊性の働き：両者の連結項としての幸福主義

3 幸福主義の存立が存在の継続を支える

第四章 科学的宗教を根幹とする人間福祉

1 人間福祉学と宗教

2 科学的宗教によって根拠を与えられる福祉の方途性

3 真理と聖との連動作用

4 真の人格主体としての存在

第一章 科学的宗教の要としてある人間福祉学

1 科学的宗教と人間福祉

宗教についてわれわれの視点から概括的な議論をし、それを元に現時点において、通念上、真理の裏打ちとされる従来の科学と照合しながら考察を加え、最先端科学とも有機的関連を持ちうる宗教という形で捉え直し、科学的宗教という概念として改めて把握をする。その上で、人間福祉の議論における所与ないし道標たる無限の可能性への導き手と連動する宗教について探求の端緒を見出し、人間福祉の学としての根幹を見出してゆきたい。

われわれは、「有機態の哲学」という立場を標榜するホワイトヘッドの言う宗教に関する定義づけから議論を始める。彼は「宗教とその形成」⁽¹⁾を論じた講義録において、宗教を「内面を浄化する信仰の力」として捉えている。人間はこの「信仰に応じて発展する」とも言う。なぜなら人間の性格や生活態度が、「内的な確信に依存している」からであり、人生というものが「内的生活」によって価値付けられているからである、とする。彼によると、この内的生活とは「現実存在の自己実現である」とも位置づけられる。かくして「宗教は人間そのものと、また事物の本性の永遠的なものとに依存するかぎり、人間の内的な生活の技術であり理論である」という定義づけに到達する⁽²⁾。このようにホワイトヘッドが示す宗教とは、人間が自己実現を目途として現実生きるなかで、永

遠性という方向性に則して内的生活を営もうとする時に欠かすことの出来ない生の技術であり理論である。ホワイトヘッドに添うと人間の次元でそれを支えているのは信仰の力であると断言することが出来る。

その信仰とは何に対する信仰であろうか。当然それは進むべき方向性とそれを指し示す主体、すなわち誘いの主体に対する信仰である。

以上のような確認に沿って、ここで神について問わねばならない。それは存在の原初性についての問いになる。上に主体という言葉を用いたが、ホワイトヘッドはこれを厳格に捉え位置づけ、「自己超越体」として理解している。すなわち究極主体の位置づけのなかに主体の明確な姿を見出すのである。そうした主体の究極の姿を「自己超越体」として受け止めることが出来る⁽³⁾。これは実在そのものである。この実在とは「原初的に創造された事実」であり、ホワイトヘッドは「永遠的諸多性の無制約的な概念的価値づけによる存在」としている⁽⁴⁾。こうした実在の軸芯が「神の原初的本性」に他ならない。永遠的諸多性と実在との間に一定の関係性があるとすれば、両者の連結関係性が明示されねばならず、その為には比較の作用者がそこに存在しなければならない。この作用者が原初的本性たる神である。かくして神は全ての現実的契機の作用者たる存在であり、それ自体現実的契機に他ならない。かくいうホワイトヘッドによると、この原初的本性とともに関連の派生的展開における現実的諸実在についての物的抱握から結果する神の結果的本性が存在する。前者の神の原初的本性とは、ホワイトヘッドによれば、具体化の原理とも表現される。すなわちそれが「特定の結果を創始する原理」に他ならない。したがって、ここには神のもうひとつの本性の内在が表現されることになる。それが「結果的本性」とされる。すなわち「神は始原的であり、終末である」と理解されるのである⁽⁵⁾。これは、神が「概念的作用の前提された現実態」であり、したがって神は「全ての創造的働きと生成の一致」とされるからであると理解される。こうして「創られたもの」は「神のうちに抱握」されていく。そうして結果への営みを辿りゆく。このように「神の本性」は「原初的」であるとともに「結果的」であるという「両極」性を持つとともに反立を内包して両立して一つである⁽⁶⁾。この両極性は抱握のプロセスのなかで連続的に一致していくことになるが、この一致において創造的働きがなされていくとすれば、その創造におけるベクトル性が問われなければならない。軸芯たるベクトル性の一致点は何にあるいはどこに帰するのであろうか。それは結果的本性の作用的内実を問うことに繋がる。そこにある本性の一致点はそれによって全てが成立する根源であり、永遠性の彼方にある統合性の完成とすることが出来るであろう。これは抱握プロセスを問うていく時に見出していくことの出来る内実である。さらにその統合性はそれぞれの個的存在を抱握において捉えることが出来る永遠的客体として包括しそれぞれを位置づける営みの連続によって成立する故にそれぞれを受け入れ包括することが出来る作用的根源、すなわち「愛」による成果作用であるということが出来るであろう。すなわち「愛」による統合性がベクトル性の根源・主軸であり、それは神の作用そのものであり、その作用主体を根源主体とすることが出来る。その

作用主体は「現実的実在」(ホワイトヘッドのいう actual entity にわれわれはこの訳語を用いる)の究極存立体の内実であると見ることが出来る。存在の全てにおいて、特に概念的実在を受け止めそれと物的実在との両立に関わることの出来る人間存在においては、この根源主体の啓示を受け止め続けるといふ営みを課されている。

この現実的実在をホワイトヘッドは、明確かつ固定的に捉えている訳ではない。しかしそれを現実的実在というエネルギーの量子とし、また電子的ならびに陽子の構成体と見なしつつ、さらなる「究極的なエネルギーの量子に認めうる現実的実在」を示唆しているとわれわれは捉えることが出来る。それは以下に概括する「エネルギーの量子に認めうる」究極性の発言にも見ることが出来る。電子や陽子をも構成体とする現実的実在たるエネルギー量子は「電子的諸契機の社会や陽子の諸契機の社会」の存在を示唆するが、この存在はそこに電磁的法則があることをわれわれに知らしめる。この電磁的法則に依存して新たな陽子や電子が再生産されていく⁽⁷⁾。そうして多様な特質がそこに加わっていき、「延長性というより一層根底的な事実」が成立していくことになる、とホワイトヘッドは見なしている⁽⁸⁾。そこに至ることにより現実的実在の実在性が明らかになる。このような多様な特質を持って成立する延長性のなかで実在性には階層性が想定される。それは究極的には絶対的事実に他ならないが、人間が把握していくプロセスにおいては「中途半端」であるともされる統計的事実としての法則に留まる⁽⁹⁾。

ホワイトヘッドの電子に関する議論を用いて現実的実在ないし現実的契機を説き明かすきっかけの論を展開することも出来よう。人間における意志について「意志の振る舞いは、確立統計原理に従う」。確立現象は個体に意志があり、個性があるから発生する現象である。こうした意志の定義は、人間にも電子にも適用できる、等の電子に関わる議論の展開も散見することが出来る⁽¹⁰⁾。後述もしているが、さまざまな展開論は、究極的な実在への諸階層の存立様相を示していると理解することが出来る。

このように示される現実的実在の究極ないし根底には、階層性の究極において、絶対たる神の存在が大前提としてあるということが出来る。この神による啓示に沿うことがあるかぎり存在の永遠性を継続させていくことが可とされる。そこには啓示とそれに沿う営みを継続させるという行為の原点における神への信仰の存立が前提され、完成型としての時空が、全てを包括する営みという実在の存在を保持し続けるといふ道に続くことが約束される。このような現実的実在を根源において支え続けるのは結果的本性たる究極主体以外にない。その存立の元で応答をなし続けるのは、その中心作用を啓示のなかに真に受け止める人間存在である。そうして一たる存立を形作る現実的実在の抱握を実現していくことの出来る神の愛としての統合作用に沿う延長的行為の連続があり、その具体形態は、人間の生における営みを自己実現に向かわせる道として定立させる許しとなっていく。この定立のそれぞれの一における有り様をわれわれは神の許しの元に在る福祉ないし福祉的存立と呼称することが出来る。その存在が人間という形態を与えられ、人間が生きる現実世界においては、

それを人間福祉と呼ぶことが出来る。

2 現代における科学の最先端：「モノ」から「コト」への道

ここで一般読者を念頭に置いて出版された物理学に関する現代的視点による書⁽¹¹⁾を参照しつつ、広く人間の行為・活動に即することの出来る現実領域に科学の目を持って望み考察を進め、人間及びその行動の有り様を深く問う為の論脈形成へと歩いていく。この考察結果は、量子力学という極めて馴染み難い領域に、一般化を通じて広くその理解へと導くことの出来る内容となる。それ故ここに引いてこれまでのわれわれの考察を量子力学の学問の流れに連動させるとともに現代時点の科学性との関連についてその理解をさらに深めていく。

われわれは上述の議論において数学者・哲学者としてのホワイトヘッドの量子論的世界観を用いて考察を深めてきたのであるが、現在この量子論がたどり着いている上記著作のような科学的段階を、さらに、既述してきたホワイトヘッドの論と密接に関連づけて考察を続けることによって、彼の量子理論に基礎付けられた哲学内包的な考察を経て「有機体の哲学」を従前にも増して精度高く築いてゆくことが出来ると考える。すなわちこのホワイトヘッド流の量子論的考察を現代量子論に照合しつつ参照していくことにより科学と哲学、さらに彼の宗教観を通じて宗教に関する議論をさらに深めることが出来るであろう。

一般に科学的なものの見方をしていくと、それは宗教からの離脱プロセスのなかで自然現象を合理的に定式化し、その知見すなわち実証的にものを見ることによって自然を操作していこうとする在り方に結果していくということが出来るであろう⁽¹²⁾。このような形で「科学は人類の精神世界の改造に先導的役割を果たした」と考えられてきたが、現代においてはこの動向に大きな変容が訪れている。ホワイトヘッドの考察に現代の量子力学的展開を導入して思索を続ける時に、上述の科学的な視点に対して次のようにもいわれる情況に達し、科学を再考すべき論点へとたどり着く。曰く、科学のこれまでの「役割は終わり、逆に、この体制が既成権威に対しそれを固定させる枠組みとなっていないか」と問われる必要が生じてきた。これは量子力学による世界の事象解明についての利用拡大によって齎された、といえる⁽¹³⁾。それというのも、このことは、 ψ （プサイ）波動関数の「収縮」や「不確定性」という性格を制御しようとするとは不能状態に陥るという事態が、量子力学上の「ユニタリー（unitary）」性の外部から制御できるパラメーターを含み外部から変動させうることを用いて ψ を制御可能とするという形で新たなテクノロジーが花開くことになったという事実に基づく⁽¹⁴⁾。ここには情報技術の向上と拡大的深化という事実が欠かせない要因となって影響を与えている。人間社会の各様の用途を「最大限達成」に導くには、 ψ の最適化を齎するような制御とその後の収縮が必要とされるが、その為には「物理現象自体から『情報』を物理現象にのせる方途」が必須となる。それには意図の達成の為の条件設定を問い「どのようにすれば良いのか」ということに解を見出していかなければならない⁽¹⁵⁾。こうして存在がどうなっているのかという存在

分析に重点を置いた解明から、「関係」の分析とともに、「どのようにして」目途を成し遂げていこうとするのかという問いに関心が集中されるようになっていく⁽¹⁶⁾。この解明を前進させる為には極めてミクロな世界に焦点を置きながら、それがマクロ世界とどのように関わっていくかという情報を必要とする。こうした方途の連続が「現実的実在 (actual entity)」⁽¹⁷⁾ (ホワイトヘッド) という世界の構成要素ないし「世界がそれから構成される究極的な実在」⁽¹⁸⁾ の営み領域においてなされていくことになるのである。

その考察に至る為には、情報ないし情報理論について、解明的示唆を与えてくれる議論を付加しておくことにする。パティスタ, R. ジョンは情報理論について次のようにいう。「情報理論においては、『情報』は入力と受容装置の間の関係によって定義される」という通常的位置づけとともに、さらに「情報概念が機械論的というよりは全体論的な概念となるのは、情報のこの関係の側面の故である」⁽¹⁹⁾。続けて、彼の発言に沿って意識と情報との議論にもその一般的全体論的な所与性の同一性に視点を当て触れておかねばならない。パティスタは、①意識は情報である。②意識のさまざまな形態は、情報のさまざまな階層レベルを指す。③どんなレベルの意識の強さも、そのレベルの情報総量の関数である。こうした情報理論と意識の関係性は、情報理論を用いていく研究上の方途をとることによって、「各種意識モデルを、統合された一般的な意識理論へと統合できる」というメリットを充実した形で達成することに貢献する⁽²⁰⁾。

この意識なる営みを、ホワイトヘッドの上記「現実的実在」に関する論と関係付けて論じておこう。それにより存在分析にさらに深く立ち入ることが出来る視点が与えられる。ホワイトヘッドは、「意識は経験を前提している」という。さらに「意識は、ある感じの主體的形式における特殊な要素で」あり、「現実的実在は、その経験を意識したり、しなかったりする」という営みの在り方をする、という。その現実的実在は、経験において、意識がある場合、「その意識を含む完結した形相的構造である」とされる⁽²¹⁾。したがって、ホワイトヘッドは、意識より深い層に現実的実在の経験を位置づけ、その経験の次元の一部として意識の層を捉えている。それに対しパティスタの場合は意識の一般理論から出発しているのであり、それと情報が一体化しているという理解をしている。すなわち意識に受け止めると同時に情報が始まると理解される。それに対し、ホワイトヘッド流に解すると、現実的実在の経験の次元から情報が始まり、現実的実在の営みに沿って情報が存立していくことになる。そこで、上述した「物理現象自体から情報を物理現象にのせる」ためには現実的実在の営みにおける経験からの出発を第一とせねばならないということになる。こうして現実的実在という作用態の物理現象はその経験とともに情報となっていく。それを情報として捉える人間の意識の層は経験に沿いながら人間の営みに沿って形成されていくと捉えられる。かくして、世界の作用性の根源領域にある現実的実在に情報が内在的に存立して、それはコトの流れとともに営まれていくと理解される。

この「現実的実在」とはホワイトヘッドによって標榜される量子論の領域の存立体（「作用」と

してある)の営みであり、それは在ることが推測される作用であり、実証的に把握されているものではない。しかし、その存在と営みにより、現実世界と営みが存立を明らかにされ、さらに確実化される契機となる。ホワイトヘッドはこうした実在をベースにして独自の有機体の哲学を構成している。上述してきた物理学の量子論上の展開はこうした「現実的実在」の「コト」としての有り様、すなわち上述の理解へと進みゆく解明のプロセスのまさに直前の状況を明らかにしてくれている。物理学が量子の議論へと思考を進めることが出来る段階にまで到ると、そのミクロ世界は「素粒子まで行くことになり、」現実的実在の世界がそこにはある。そこにおいては、現実的実在の経験を通じて情報の世界へと広がることになるが、それは、モノからコトの広がりとして表現することができる。その内実を目を向けると、「モノの条件とされる質量も、コトのあるタイプに過ぎなかったり、エネルギーだったりする」からである。このコトとは、現象、事象、その抽象的側面、意味上の実質等として理解することが出来る⁽²²⁾。

ここに示される「コト」についての「意味上の実質」的側面についての議論は、ホワイトヘッドの論においては、それをより現実的に、営み・展開という動態的側面に視点を当てて捉えたと、「生成」(becoming)の議論と関連させて連続的展開が示されていると理解される。しかし彼は連続性の生成はあるが、生成の連続性はないとする⁽²³⁾。このことに少しく触れておく。

「現実的契機(ないし現実的実在)は生成する創られたものであり、それらは連続的に延長的世界を構成している」。この基本的存在に関する発言には「延長性は生成する、しかし『生成』は、それ自身延長的不是ではない」という主張が続く。ここにはホワイトヘッドの延長論との関連を持たせ「把握」論を介在させねば理解不可能な側面があるが、それはもう少し後の議論とし、この生成そのものについて少しく触れておこう。ホワイトヘッドは、これまで哲学の古典的「時間」観念から引き継ぐ新しさへの唯一の契機性という意味合いを持って生成という表現が用いられてきたことを、それは「誤解」であるとする。そうして連続性の創造そのものが許容さるべき「形而上学的真理」であるという。このように述べられていることを解題すると、「ニュートンによる光の粒子説を、波動理論と調節している」と理解していくことが出来、さらに「粒子は事実『存続物』である」、しかし「『存続物』の観念には実現の完全さに多寡がありうる」。したがって完全さの次元で見ると多様な形態が見られ、このようにして「一連の波動は、その経歴の全ての段階で社会秩序を含んでいる」。この秩序は「初期段階では緩やかに関係付けられた珠数繋ぎの人格的秩序」という形をとるが、「これは時間の経過とともに漸次消滅する」。このような波動は社会的秩序を伴いながらも人格的秩序を伴うことのない結合体となる⁽²⁴⁾。こうして連続のみが生成されていくのである⁽²⁵⁾。

この「コト」の連続としての存続ないし生成する延長性を、その特性の現実的実在の段階における「把握」(ホワイトヘッド)論によってさらに解明することが出来る。それは「コト」の状態のミクロの展開を辿っていく時にその事実としての現実の連続において捉えることが出来る。それは物理的な「モノ」の世界に立脚する内容ではなく、むしろ前方の究極からの働きかけ、すなわち導

きないし「啓示」のなかにあると捉えることが出来る。上記の連続の生成ないし延長には、「現実的實在型の諸事物のそれ自身による具体化を引き起こす活動」を内に含んでいると解することが出来る。この具体化という延長プロセスは、「前者の實在（実質）が後者にとって一つの与件として客体化される」という在り方を持って分析理解される。また「その与件」は『『主体的形式』のさまざまの要素で纏（まと）われた主体的満足に吸収される十全に纏われた感じへと分析されうる」。このプロセスは、さらに一般的に表現するならば、永遠の客体また究極における抱握をなす神による占有化、我有化とされる抱握へと連続していく、ということが出来る⁽²⁶⁾。ここに示される「抱握」とは、与件の世界の心的営みと後方の「モノ」から展開されてきた自我的把握が可能な対象領域との関係性に対してどのように捉えられるかを問題とせねば解明されないが、ここにはホワイトヘッドが示すあらゆる領域における両極の両立論⁽²⁷⁾が適用され、情況理解の基本となるとされうであろう。両極は両立して情況内の営みを完成へと導いていく。心的究極と物的情況は両極を形作るが作用性の営みのなかで両立する、そうして連続の生成が可能になっていく。

こうして物理学の領域内容は、「モノ」にキーポイントを置く在り方から両極の両立情況たる「コト」へさらに全体の明示たる情報へとその解明の領域を一般化していくことを可能にする。そうした理解の元で、物理学は現在に至っていると把握できるが、それは具体においては広義に多様な姿として捉えられ、社会現象の科学とも理解できる性格を持つとともに、また情報科学ともされうるそのものへと至ることになる。このように理解されうような変容が現代科学の最先端部分では広がりを持ちつつある。そのような議論はホワイトヘッドの推量をより実証性の高い段階で捉えることを可能にすると言えよう。

「量子力学の理論は、時空存在の實在法則と推論の情報処理からなる」とされるミクロからマクロに広がる作用把握の科学情況のなかにあつて、それはまさに人間の営みから世界にいたる社会現象の科学であるということが出来、広く人間の営みを世界の営みとして説き明かす内実を指し示す推移を辿っていくのである⁽²⁸⁾。このように評される量子力学の領域にさらに踏み入り考察を深めてゆきたい。

3 量子力学の現在：情報理論における「コト」の世界

人間が生きている世界とは物理的情況そのもののなかにある営みの連続であり、それは同時的に神の目的性の元に対立的でないし反立的に存在している。すなわち神は世界と一つでありながら、前述したようにその原初的な本性（ホワイトヘッド）においてその原初性に発して反立して存在する（ホワイトヘッドは、この反立について、「対立をコントラストへと変える意味の交替」という）。それは統合というベクトル性の元に在るが、しかし単なる統合ではなく、愛としての統合が實在としてあり、新たな情況を継続のなかに埋め込んでゆく⁽²⁹⁾。そこにおける連続性は、生成されるが、創造という生成そのものは持続的ないし連続的ではないと先に示した。それは、統合、しかも愛と

しての統合と総括できる目的性から離れる世界の反立性に対立していくなかにあって、許しとしての作用という現れの営みを継続する。

そうした神の作用力は、ホワイトヘッドの論に沿ってみていくと、反立態をエネルギーとしながら成立してゆくとも理解できる。この状況を物理的世界において表現するとすればどのように表されうるのであろうか。再度いくつかの知見に沿いながら問うていくことにしよう。その為には次のような表現が適切であろう。世界の「モノ」としての物理的存立体は、そのエネルギーとしてのプランク定数 h たるミクロの量子情況へと分析解明されていくことにより、波動関数 ψ への動向が辿られることになる。すなわちプランク定数 h というミクロの量子情況へと分析がなされていくことによりエネルギー情報への内実転換がなされてゆき、そこではミクロ、マクロといった対象サイズによることのない作用特性、すなわち対象の物理特性によることのない広い領域の対象を有効に表現していくことが出来る方向を持ち、生の情報内容そのものへとその有り様の方向性に沿って進むことが可能になる⁽³⁰⁾。このような推移を辿り、自然の混沌とした秩序内容が、特性を持つ枠組みないし作用動向という有り様を表現することになる⁽³¹⁾。後に述べるように、この秩序内容をボーム、Dのいう「内蔵秩序」としてみていく論も可能性を持ちうるかもしれない。このボームによる見解とわれわれの視点からする当該論の解明についてはホワイトヘッドとの対比をも交えて後述している。

ところで、この段階でコトから情報に至る流れをどのような試行プロセスとして捉えることが出来るかを生命の作用の元に考えてゆこう。それを観念と意識に関する議論を交えて捉えてゆく。アルカリイリーリ、Jim 及びマクファデン、Johnjoe らは量子生物学の立場から「観念は情報の凝縮態」と理解できるとしながら、「意識は（その）観念を一つに纏めて自分にとって意味ある概念を創る」とし、意識のなかで、われわれの神経情報はどのようにして結びつけられ一つの観念になるか、という問いのもとで思考を展開していく⁽³²⁾。そのような問いに対し、ベンローズ、ロジャーズがいう「脳のなかで量子力学的現象が起きている可能性がある」との発言に言及しつつ、彼らは、それは「神経細胞のなかのイオンチャンネル」の存在によるものであり、それを通過する実体は「非局在化して広がっていく、粒子というよりコヒーレント (coherent) な波動」としてそれを捉えることが出来る、とする。こうして「イオンチャンネルの状態が神経細胞の状態を反映している」ことの解明が試みられていく。これは「結びつけ問題」の解明の糸口にもなるであろう。すなわち「神経情報はパルスを発するなかに閉じ込められたが、そのパルスによって生じた電気活動は、脳の電磁場に含まれる全ての情報を一つにまとめあげる」⁽³³⁾。こうした展開が推測されるという。このような結びつけ問題への解の探査にも関連すると思われるが、前にも触れたように、電子は意志を持つという見解に基づき、個体、干渉、対話、共鳴、統一、等についての解明への挑戦にも目を向け、その可能性を問うていくことについて課題設定をし、それを重点的に視野に置いて説述を進めようとする試みもある⁽³⁴⁾。

こうして、前節にも述べたように、モノの世界がコトの解明をなす世界についての示唆を経て情報という作用動向へと理解上の転換がなされていくことになる。それは特に人間福祉に則しているといえ、そこにおける経験の連続のなかで人間の生における生活問題状況に関する情報、すなわち対象化できない多くの諸事項を内在させるが故に放置されたままである生命とその自己実現に最終的に関わる問題状況に移管する情報の説き明かしがここには解を持つことになる。それは対象化して把握できない前方の人格主体からの導きによる現時点の人間の生存情報、良き生への道といえる方途的内実そのものに繋がっていく。それは究極において真の主体としての神の導き、さらには主体的存在の広がりたる人間と神そして世界の相互主体性の状況を指し表し、そこに作用として現される神の許しの広がり、そこに許し在る故にさらなる高さを持って表現されていく人間福祉の実質存在へと繋がっていく。

こうしたいわゆる「結びつけ問題」の推移のなかで、まさに波動関数 ψ の動向が人間の生においてより具体性を持って明らかになっていくといえる。これは上記のようにモノからコトへという推移を経て情報として捉えられる作用状況として明らかになっていくものであり、それは原点的には量子論上の展開としてのプロセスと言えようが、その動向の始めに在った神の原初的な本性として前提的にホワイトヘッドが有機態の哲学に示す内容であると捉えることが出来る。それはまた今後の真理の探究から宗教上の世界の営みまでを包含して理解を広げていくことを可能にする科学の最先端たる量子力学の現在状況に基づく提示である。

4 高度情報化社会のなかの福祉の状態把握

① 高度情報化・管理社会化の元にある個的存在

量子力学の現在を、極めて概括的に触れて議論を進めてきたのであるが、こうした科学の先端部分が齎す情報処理の状況把握とそれがわれわれの社会に与える事態について触れ、現況に甘んじてしまうことの危険をも福祉に関連する範囲で指摘しておきたい。

現在を科学の拡大高度化といわれる事態の元に捉えると、その具体的社会の現状は高度情報化という言葉で把握することが出来るであろう。それは例えば量子コンピューター等という用具上の高度化を目前にして、情報データの蓄積が膨大な量的拡大を齎すとともに、その処理能力も格段の展開を齎すことになる。この事態を念頭に置いてわれわれの論題に則する範囲で思索しておく。

ブルース・シュナイアーの著書「データとゴリアテ：データ収集と世界支配の隠された戦い」をここに挙げた問題意識に沿う多くの著作の一つとして取り上げる。この書は、これまでとは比較にならないデータの発信、蓄積状況とともに、それが監視の元に置かれることになる危機状況を指摘する。それを「大量監視社会」と表現する⁽³⁵⁾。こうした視点による現代社会への警鐘論は数多い。その一つとして上記著作を取り上げ例証とする。それによって目の前の営みに操作可能性を広げ対象化による物化性の世界としていくことの限界的危機をここで確認しておきたい。

描かれようとする現状とは、コンピューター・ネットワークの広がり人間社会における操作密度の高度化及びそれが齎す管理社会化を前提にし、さらに量子コンピューター時代の到来により急速に加速されるミクロの次元の内部について顕とされる人間の自由と個的存在の喪失状況に及ぶ危機に対する警鐘がある。そのもうそこに来ていた多種多様に渡る事象の解明・把握が進むことの裏側が明らかにされていき、その把握領域の拡大により人間存在の管理、監視の危険性が加速される事態が急展開することをわれわれは告げ知らされる。そうした密度高い管理、監視の状況のなかであって、人間生活における問題性を解明と解決へと向かわせるという利点とともに、あまりにも密度高くしかも広がりを持った操作可能性への道を開き人間の自由の喪失という個としての存立を崩落させかねない事態への直面を告げられる。それはある意味で操作可能領域の拡大による、上記した管理監督への危惧を急進させることになる。齎される状況はやはりここでも両極を形作る。可能性と危険がここにおいても存在していくことになる。われわれはこれを両極の両立（ホワイトヘッド）として新たな理解を加えていく必要性の元におかれる。

ここで近未来を指し示す書を取り上げこのような論点を挿入したのは、機械論的な科学的対象化が、現実にも目を奪われた自我に則した判断領域に留まる時に発する危険を上記の発言が明確に示すからである。今ここに示された近未来の事実は、まさに人間がこれまで度々陥ってきた科学的方途に接するにあたり自我を越えた人格によって是正し、目を自我領域から広げていくことを可能にしてゆかねば状況を克服し難いことを告げ知らしめる。その為には目を前方に向けその前方における主体の声に心を研ぎすますことによって状況克服をなす以外に道はない。その道は究極からの導きを、これまで何度も触れてきたように愛による統合性という方向として内在させている。その究極主体の啓示を忘却し、危機を放置する科学は真の科学たりえない。真の科学とは今この時点で前方からの主体による導きの元になければならない。現在の超管理・監視社会への統合化の危機は人間において与えられた自由な自己発揚を相互に築く人格参与の連続態としての営みから遥かに離反してしまう事態を齎してしまう。この一例のなかに、われわれは科学が宗教的なベクトル性を内在させねばその役割を可能性の拒絶へ導いてしまうことを教えられる。科学はその本来の機能を果たす為には科学的宗教という在り方を方途上において包含していなければならない。その為には、今、この時においては、察知される管理監督に生じようとしている存在性の自由度、自由な可能性の発揚を奪うような態様を、事前に察知し対処することの出来るシステムをミクロとマクロにおける諸状況を解明し解決する道のなかに埋め込み、陥ろうとしている危険への対処法を時に沿って導きだしてゆかねばならない。それは当然データの有効な利用を否定するものではないが、同時にデータの秘密保持を含めた取り扱い、支配の為の用具化についての対応、処理における適切さを形作ってゆくことを不可欠とする。その方途的努力をも含めて高度に情報化されてゆく時代の前進が、生のより良き形成と発揚を愛の統合性のなかに築いてゆく道程に沿って辿られねばならない。このような道程とは福祉という人間が人間らしく生きてゆく道筋における生の問題を解決してゆく歩みに他な

らず、その歩みに即してミクロ的マクロ的方策の探求が進められてゆくに際して、われわれは前方からの示唆・教導に目を向けることを忘れてはならない。それは次に述べてゆこうとするベクトル性の内実を問う作業に連なる。

② 福祉の実質におけるベクトル性を問う

量子次元にまで至るミクロの情報取得及び処理は、前項にも触れたように絶えず究極を意味する全体性に達するマクロ的広がり念頭に置く営みをプロセスに内包する。それはミクロ次元の問題解決へのベクトル性ととともに、それが歩みゆき、行き着こうとする前方におけるマクロ上の問題解決について、そのベクトル性と内なる連関性を持つ。そこには生活レベルの具体ないしミクロの福祉レベルにおいては人間の身体的精神的な生きるに伴う「生き辛さ」に関わる内容、さらには前述の限界を越えながら捉えることが可能な人間の直面する生活問題情況、すなわち他の箇所でも詳述を試みる生活の構造機能上の諸問題（生活構造論における問題解明、解決）が視界に浮かんでくる。それは、人間における相互性の技術上の諸問題（エンパワーからリカバリーへ至る技術論上の解明）、さらにはどのように生きるかに連動する自己実現上の問題に即する諸対応の内容として、福祉内容の具体の広がりという形を持って示されることになる。それが社会ならびに広がりを持った世界に関わり、さらなるマクロレベルの遂行に連動する。その解決の努力においては、人間が人間らしく生きてゆく道に通じていくことが広く求められることになる。その道は、人間が生きる対象化し分析把握されていく範囲に留まることなく、そこに固着・滞留しない前方への進展に関わる可能性を持ち、自己の理性信仰に捕われることのない、絶対の元に在ってその究極主体存在への信仰に依拠しつつ前方を見つめ続けて行為して生きることを続行させるその有り様についての問いが不可欠となるのである。その対象化して捉えることの出来ない前方の諸課題を念頭に置き生きてゆく道に、如何にすればたどり着くことが出来るのであろうか。それは永遠なる彼方の神からの啓示を受け止めそれを抱きつつ瞬時、瞬時に受容していくことの出来る靈性の働きを不可欠とする。そこにおいては人間世界の持続・継続を許し、その個々の存在性と相互参与性を可能とする愛とそれによる統合的世界への道を与え続ける、そうした究極の働きかけの道に生きる自らの存立が不可欠とされる。その為には、上述の靈性の働きにより、自我次元の対象化の世界に作用を前方から及ぼし、そこに恵みとしての影響を与え導くという作用結果を齎す行程とそこにある主体的實在の元にあるということ以外に道はない。それは前方からの究極主体の働きであり、結果的に許しと恵みという究極の包摂といえる対応に繋がる福祉ないし人間福祉という作用態を形作り、それにより人間のより良き生の営みが形作られ、その存在を通じた世界存在の道として存立をなし続けていく。福祉の実質は、このようなミクロ次元の個の存立を通じマクロへの道へ到るそのなかの全てのプロセスに一貫して流れるベクトル性を受け止めそれに導かれることによって真実存在することが出来る。あえていえばこのようなベクトル性と同一・同体への道を辿ることによって実質化を確実にしていくことにな

る。

5 ミクロ世界から展望するマクロの世界

前節に述べてきたベクトル性は、現時点の人間による自我把握の基に示される精神・身体・社会的存立の困難故の問題状況を打破し、関連する生活構造上の生き易さへの道と密接不可分とされる領域に内在する問題克服の各様態を越えながら、さらに、一層細やかに密接にマクロ領域に包含され存立しているミクロ領域の対象化可能な問題の発見その克服・解決へと進みゆくことを同時的に要請することになる。

ここでわれわれはその問題克服の領域において作用を形作る生命について述べておかねばならない。その前に、生命のエンジンとして「地球上の全ての生物の細胞の全ての分子を作って」きた「酵素」についても触れる必要を感じるが、ここではその記述は割愛しておく。ただスクラットン、ナイジェル等の議論に沿って生命解明の重要性を視座におくことの重要性とそれに関わる「酵素」研究の重要を指摘するのみに止める⁽³⁶⁾。

さてその「生命」であるが、シュレディンガー、エルウィンは、「熱力学の嵐の海を経て量子の元に至るまで、全てを貫く秩序に支配された型が生命で」あり、マクロな世界が量子の世界に大きく影響を受けるとする。その御陰で「トンネル効果やコヒーレントや量子もつれという量子レベルの現象を利用する事で独特の存在」を形作る。「生命はコヒーレント状態をノイズに邪魔される事なく逆にノイズを利用して量子の世界との繋がりを維持」するとされる⁽³⁷⁾。

このようにミクロレベルの作用は生命に媒介されながらマクロ世界の営みとの関連、ないし結びつきを持つ。ここに見られる生命の働きによってマクロのベクトル性との連動性が形作られていく。それはマクロのベクトル性へのミクロからの関わりであり、そこにおいてはミクロ内の問題克服の営みとして把握することの出来る対象化可能な周辺世界との関わり形成と問題性の発見さらに克服という作用的営みの広がりが増強されていく⁽³⁸⁾。

そのような領域に関する対象化が、問題克服という目途に沿う為には如何なる方途上の在り方が求められるのであろうか。それが単に解決という目途に固着化して続行される時、その対象化はシェーラーのいう物化的対象化に終始することになる。そうした自我世界の自利性にしか結果しない意図を越えるベクトル性が自我上の意図を越え包摂的に存在する。生命を与えられた人間の可能性を発揮して相互的存在参与のなかに生き、人類の存続的生存に貢献していくプロセス内容がそこには包み込まれている。それによって与えられていく事実としてそこには可能性たる生き方が約束されてある。存続的生存を問題から離脱した豊かさによって満たそうとする神の愛の元に在る作用存在により、物化的対象化の世界では生かされないままに終わる主体的発揚を、自らの自我に執着することのないあるべき生命の存続の在り方に沿って自明なものとして示されことがなされていく。こうして生き辛さのなかに在る人々を神の愛の元に在る存在として人間の自我上の存立におい

でも愛される存在として受け止め、愛のままに相互的に参与し合う相互的存立の道が擁立・確定される。それは決して物化的対象化に結果することのない人間相互の本来的な関係性への帰還に他ならない。それが問題解決・問題の克服に繋がる真の道であるとわれわれは見定めることが出来る。この道は広く福祉の学びの道において説かれる生活構造の人間らしく個性的に精神・身体を維持して生きる社会的有り様に繋がり、その態様に内包される各種の作用は段階を経て各人、各主体へと連動することが出来、人間における内奥深くにある霊性の働きを経て神の愛へと繋がる事が出来る。こうしてマクロの世界からミクロを包含して全てに繋がっている永遠の彼方にある最終的な統合性へと向かう道にあることが可能とされる。

第二章 科学的宗教を土台に人間福祉を考える

1 人間福祉から見る自我存在の福祉：見える、把握することが出来る福祉

人間福祉とはわれわれの生存におけるどのような領域に位置するのであろうか。それは生活福祉とはほぼ同様な意味に理解されることが多い。人間の生活が問題の克服によって営まれていくことを目標値とすることと考えられている。しかしそのみであるのであろうか。生活上の問題がないということとは、人間の衣食住を基本としながら、一定時点の生活が維持されていき、生活の水準という視点から見ても充足が在ると理解されるものの、実際は現実のそうした問題状況の把握とそれについての表現が極めて困難である。それは今在る状況への期待的有様とともに、その生活がどのような方向性を辿るかという、これまで述べてきたような前方からの支えと導きを必要ないし不可欠とする。今、すなわち現在という過去からの流れとともに、前方の次元からの働きかけが絶えず在る。その事は後述の生活構造論上の議論においても注視すべきこととして述べている。それは生活というものが過去からの流れの今とともに、その今が至ろうとする前方から絶えず影響を与え続ける存在性が、プロセスのなかに常に在るからである。それは自我存在の有り様そのものと同時的に在る。自我領域という意識の次元で捉えられるかぎりであったとしても、自我によって捉えられる範囲における将来状況を常に含んでいる。捉えられる範囲という自我の働き、すなわち見える範囲の世界、対象化可能な世界である自我領域の人間福祉がこうして特定化される。人間には自己における生活の範囲で、その充足という形における福祉を描き求め実現させていこうとする、公的、私的な充足形態がある。そこに人が生きている内実には則した実践がその人の対象化され目で見えることの出来る自我存在の求めに従って展開されていく。その福祉上の展開はその一たる個人の展開方向にある存在へと向かう。今そこにある限界状況を越えていく可能性への道としてその道程はあるのである。それは自我上の捉えきることのできる領域では把握しきれない多くの潜在性を包含する可能性への歩みであり、捉えきれないという特性は自我を越えていく歩みを意味しており、これ

は啓示を受けとめる心の態様を不可欠とする。このような作用領域をシェーラーは人格領域としてわれわれに説き示そうとしている。そこには人間が対象化できない彼方から示される人間に許された恵みであり可能性といえる、また人間に内包された受容的可能性ともいえる有り様がある。その真髄は対象化されえない主体領域からの導きとしてのみ発揚される内実であり、行き着くことの出来ない全ての前方の作用態を内在させており、それは神の啓示としてしか表現することの出来ない遥かなる主体からの導きである。遥かなるとは時空的隔たりを意味しているのではない。それは垂直的前方をも意味しており、それ故に全ての前方である。それは内にある受容主体と一体であるという意味において今ここに実在する主体であるとともに究極の彼方の実在でもある。さらに福祉について述べると、今ここに見える把握することの出来る自我上の福祉とは、そのみで独立しているのではなく、人格主体というその人に則した人格への神による啓示と関係するなかで明らかになる主体としても存立している。それを察知することによって真の福祉が形作られる。このように人間福祉の総体とは自我上の福祉のみで完結するものではなく神の前方からの導きによって完遂されていく。

2 生活構造の確立を自我及び人格形成の土台にする

自我領域の福祉とそれと密接に関わりながら自我を越えた領域からの啓示ないし信仰に基づき直感できる言葉と様態が、その人の福祉を作り上げてゆくプロセスとなることを前提にしつつ、それを進行させる実践行為の展開について理解を進めていくことにする。そのような状況が形作られていく流れは、自我及び人格次元に関連する生活構造の解明をすることによる現実の福祉領域に則する内容把握として明らかにされていく。

下記しているような各生活構造及び要因は、相互に関連し合って存立する福祉の内実を示す。生活全体の概要を知る為に各構造因子の人間の生活に則した内容をいくつかの例示を伴い示すことにする⁽³⁹⁾。まずは【生活関係構造】といえる家族関係及び近隣ないし小地域内に生きる人間相互の関係であるが、それには生活のなかの日常的な人間関係、さらには支援を必須とする人々の支援に関わる人的関係・ネットワーク等が専門・非専門においてある。ここには人を介して生活支援における生活手段に関わる内容が併存し、他の構造との重要な関わりを持つ。その議論の前に、この関係性における自我的側面と人格的側面に触れておく。この関係性においては家族的、社会的、制度的という関係区分が相互対象化の元に可能であるとともに、それを越えた共感共同の元に存在する「あなた」の存在性に参与してあるという人間の内的深さに寄り添い合う在り方がある。これは人格上の相互存立への歩み出しであり、人間の内なる存立が前方の存在性たる人格主体の啓示の元に在って発現されてゆくことによる。このような自我領域、人格領域の関係構造が、ここには見出されうるが、この生活上の自我領域の対象化可能な当初的な構造が、対象化をなし得ない垂直性を含む全ての前方からの人格領域における態様と連関性を持ち、その啓示の元に在ることによって、関

係構造は実質的な関係要因と関係性を保持し実在性へ向かう歩みが可能になっていく。そうした方向への共感共同からの歩み出しが人間の心深くに啓示を受け止める発端となる。次に【生活手段構造】について言及する。これは日常生活用具、特に衣食住に関わる構造要因、さらに移動・交通・通信手段等の密度高い配置に関わる諸要因、また医療・保健制度等、生活援助・回復・問題予防の制度・活動体などについて幅広く構造展開がある。先に示したように、この領域は前述関係構造との連携によって動的営みを可能にしていくが、ここにおいても自我領域と人格領域との作用区分とともにその両極の両立を念頭に置かねばならない。動的には関係構造の構造要因それぞれは目に見える範囲における自我領域の内容であるが、ここに人格領域の関係性において存立する存在参与の為に必須とされる構造要因が形を伴い加えられる。例示するならば、現在、形を整えるに至っていない人間の可能性発揮の用具の手段が個の潜在性にも目を向け人が人として相互に生きゆくことを可能にする手段構造が堅固化されていく。このような営みは、前方の啓示を受け止めながら作用化の形態化として果てしなく進んでいくのである。

次に取り上げる【生活空間構造】においては、居住に関わるその人たるに値する諸構造とそれを可とする諸要因、その個的・集団的在り方を施設空間をも含めて成立させていく。地域環境、生活環境に関する構造・要因を含み広く諸制度的対応力の完備が不可欠となる。それは言うまでもなく地域的、都市的構造等をも視野に入れ、広がりを持って形作られてゆかねばならない。それぞれにとってはそこに生きる内なる人格主体が相互的人格性を生かし高揚させていくことが出来る前方からの啓示が極めて重要であり、それなくしては空間構造の発展的構造を期することは出来ない。次には生活の実質的な内容ともいえる【生活文化・生き甲斐構造】を取り上げる。これには学問・芸術・娯楽等の領域におけるその享受・活動参加を充実高揚する教育・文化の様態が制度を含み設定を求められる。この領域は生活の質的側面に最も関わる側面であり、上に述べてきた生活関係、手段、空間の各構造・要因と緊密に関わることによって実現への道をたどる内容領域である。関わりの中にもその文化性の構造要因が見出される。特にこの文化領域は、目にする範囲の自我的対象領域を越えて高揚する特性無くしては語り得ないものであり、これに加えて人格主体が現在の人間の展開要素に対する前方から示される志向性の道として営まれてゆくプロセスの実質を見出すことが出来る。以上のような構造と要因は、個々の生活【家計構造】、【地域経済構造】が個々の段階の個的ないし家族の収入・支出と関連して構造化される。これは上記のプロセスを個々の段階で実現させる基盤となる。以上のような個的生活基盤は【生活時間構造】すなわち日々の生活時間の生活ニーズ充足へ向かう諸構造・要因における相互連関上の営みの積み重ねによって実体化されていく。自我領域における時間構造は、まさに一つの自我存在が生きるその時その時を指し示し、目に見える世界の扉を開いてゆく。それは、対象化できる世界領域が永遠性のなかにある人格領域の流れのなかに位置づくことによって実体化を確実にしていく。

このような生活の各分野の構造及びその構成要因さらにその内包する各種機能とともに、さらに

は、一たる個的存在が関わる創造的行為をなし得る労働ないし社会的行為上の作用発揮の場と構造機能が、上記個の集団的な生活要因、構造や機能と密接に関わりながら、可能性に応じてまた潜在力の発揮をも考慮され生きることを念頭に置き形作られてゆかねばならない。したがって、上記の構造要因に個の社会的な経済構造に深くかかわる【労働ないし創造活動に関わる制度・環境構造】が加えられねばならないし、その軸芯に、上の全ての構造機能要因が結びつき、創造的に保持されねばならない。さもなければ、一つ一つの存立が経済的土台から切り離され、自分にとっての自立へと達することが出来ない消費者としての人生のみが描かれることになり、生（せい）の実体を失いかねない。しかし単なる経済的利に奉仕する経済効用にのみ従属することなく、「福祉効用」というベクトル性として表現できる個の可能性に応じた価値発揚が労働及び創造的活動をも内に包摂する生活概念の元に認識され、そうした人間の生の総合化された生活構造として成立することにより構造要因と機能発揮を真に伴いつつ人間が生きる条件となる。こうした生活構造の全てに渡る確立への歩みが、一たる個の生存における人間的生の充足を存立さすべく辿られねばならない。この生活構造の確立とは、良き生活への道である故に功利主義者流にいうと「快」への道以外の何ものでもないと言われるであろう。しかし、この快とは、人間の全てが区分なく持つ存在価値に則した、生の高揚プロセスにおける土台となる快である。

上述の生活構造のなかに見られる自我的存在からこうした道程を辿ることが、「個的存立体の価値と倫理的整合化を可とする愛の統合作用への道につながる」。こうして上述の方向に端を発する一たる個の存立条件の連続的定立が求められ具体化される。この営みの広がりのおかげで、人間存在の根底から存立する平等性の元にある人格主体化への近接が道を開くことになる。これは個の一たる存在の客体化、そうしてその永続的客体化へと進み、その客体へのプロセスはホワイトヘッドのいう「合成種」と「主体的種」という展開を経て、客体化をなす主体の究極性による主体的我有化ないし占有化、すなわち「抱握」への道となる。

3 人格主体の相互形成の実際：相互的人格主義

上述の「抱握」における神による我有化、占有化は、神の行為としてのみ可能である。それが人間の私性によって現実性の名の下に蹂躪されることのないように絶えず注意を払わねばならない。しかし、例えば生活構造の形成にあたって、自らによって、あるいは関係性を持つ人々及び人を取り囲む各様の環境、制度・機関等によって特定時点における条件の影響を被ることが多くあるという事実が真の福祉を翻弄する。それは自然的条件とともに、自我領域におけるその個的存在を対象化した時に訪れる個的・集団的判断によって多様であるが、人間における独断的に固着化した私性による影響を受けることを否めない。対象化による判断という限界状況とはいえそれは一面の応答力を持つ。しかしその応答力に個人的社会的な平等や調和を始めとして妥当性を欠如する時に、その状況適合性は生における問題状況の解決からはほど遠いものになってしまう。こうして、人及び

人々に内在し前方の存在としてある人格主体との相互存立が必須とされる条件探求の不可欠をわれわれはさらに知ることになる。すなわち前方に想定できる改善への道をどのように察知していくか、それはさらなる前方の主体的存在の導きを示す各様の条件提示の有り様を待たねばならない。また自己自ら歩みゆくその道は自己への関わりの方途と関係性を持つ状況内において提供されていくことに注視しなければならない。そこには相互存立条件への問いかけが絶えず無ければならない。その問いかけと解の探索は、相互的人格主義に則することを要請される。その解は、いつもプロセスにあり、人間の自我性の位置からは、これ、ないしそれと明確に指定することは出来ない。揺らぎながら相互性の心的共鳴を探る営みが求められる。可能的存立を信じ関わりながら歩むことにより、その相互性には啓示として訪れる有り様が与えられる。啓示については第三章2節において霊性との関係において総括的に触れている。

さらに当節において相互性のなかにある管理化について弊害をも加味して注視しておく。相互性は、関わりにおけるあるべき態様を示しているが、その全てを許容できない危惧する側面をも内包している。それは豊かな共同性の器であるとともに、互いに規定し合う枠付けの側面をも内包し、その管理的要素によって、自由のなかに前進的創造性を築く可能性を喪失させる危険を持つ。そこには開かれた可能性を相互性のなかに持ち合う個・共同の在り方が絶えず求められてゆかねばならない。人間の自由な可能性発揮に閉鎖をもたらし状況を防ぎ、創造的可能性発揮を存立させていくためには何が必要なのか。統合性と愛の存立による前進的方途のなかに創造の営みを探ることが、相互的人格主義の元で不可欠とされる。この視点を掘り下げ、以下本章4節と5節において福祉の方途上の有り様を例に取り上げながら確認・考察をしていくことにする。これらの節は本節の問題意識に添う解題的な意味を持つ。

4 エンパワーからリカバリーへ向かうプロセス

エンパワーからリカバリーへの福祉における方途上の議論を霊性の深みのなかで考える。それは福祉の方途性についての議論であるが、そうした福祉の方途と宗教的働きとの関わりの方途に作用の合一性を見ることが出来る。リカバリーとは自らの人格性の発揚が前方の人格主体との相互性を持つ時に訪れる内的態様である。そこへ至るプロセスを福祉の方途において関連する領域から捉えていくことが出来る。こうした議論は福祉の方途に関して広くなされている。それは人間の存在論や人格論に極めて深く関わり、その原点となる科学的宗教にも及ぶ解明の道を指し示してくれる。またその道における科学の現代の態様とも密接に関わる。特に当章の帰結となるリカバリー論は最終的な結論部分とも深くリンクする。

① エンパワメント、ストレングスからの道

われわれはこれまでの福祉に関する方法論上の考察⁽⁴⁰⁾において、Chapin, R.K. が言及するスト

レンジスアプローチとエンパワメント・アプローチについて触れた⁽⁴¹⁾。彼は後者を「クライアントの動的状態の改善を実行していくことにより、その力の状況の改善が図られ」、その結果エンパワメントが可能になることとする。こうした動的に人の内奥で働く作用は、福祉が重要視してきた「その人」に備えられた「内なる力の発揮」である。もう一つのストレングスアプローチは、人の持つ「強み」ないし「長所」を原点にしたチャールス・A. ラップに発するといわれるケアプランをベースにした人への支援的な戦略とされる。それによりクライアントの生活にさらなる力を生み出していこうとする。それはクライアントの生活に関与し、真に力を発揮していける明確な機会を通じて、潜在的な能力を目覚めさせ個々人の再出発を可能にしていこうとする方途に他ならない⁽⁴²⁾。ストレングスアプローチは、その施策上の構成体の作用性に関して、特にエンパワメントすることとの関係性を密接に持つ。ストレングスは、力、強さにおいて自我上の操作対象を領域とし、クライアントの現在の強さの状況における評価を示す。さらにそれらはアプローチ施策の組上げにおいても評価の対象とされ、自我の構成態の状況内に見出すことが出来る。しかし、注意すべきは、そこにある作用自体は対象化することが出来ないのである。なぜならそれは揺蕩(たゆた)いの内にあり、ただそこに把握できるのはエンパワーされる作用の流れの一瞬を捉えた形態の程度に応じた姿のみであり、それはエンパワーの現況としてのストレングス状態ということが出来るのみである。

この段階で、エンパワメントという作用に極めて類似するシェーラー、M. のいう「何ものかへのすべての努力のうちにあるもの」について言及しておく。彼は、この努力のうちに本源的「情緒的要素」を見出している。その「情緒的要素の発揮」として理解される全ての志向的努力には、「何らかの価値感得が、努力の像としての要素あるいは意義的要素を基づけつつ入り込む」とされる。これは「通常実践的動機付けと呼ばれる」。「全ての動機付けは体験される因果性である」。しかし「努力と意欲が言わばそこから現れ出るその都度の感情状態は、(そうした)動機付けとは異なる」。それは「物理的な『衝撃(背後の力)』の現象を自分のうちに含む関係」である。それをシェーラーは「努力の源泉」「バネ」と言う役割を有する「情緒的要素」として認識している⁽⁴³⁾。

すなわち、われわれがここで取り上げるエンパワメントとは、シェーラーによると、この価値感得を伴う動機付けとは異なるその基底といえるような「源泉」であると理解される。あるいはむしろ源泉の力動性を表現して「バネ」と認識され、動機付けとの連動状況であるとも理解できる。そうした自我的状況、及びその躍動的「衝撃」から次第に人格的な本源的存立へと帰還する道が辿られると理解できる。こうしてわれわれはリカバリイの議論へと導かれることになる。

注

(1) Whitehead, A.N., *Religion in the Making*, Cambridge, 1926, (ホワイトヘッド, A.N. 著 齋藤繁雄訳「宗教とその形成」著作集第7巻 松籟社 1986)

(2) 同訳書 pp.5-6

- (3) Whitehead, A.N., *Process and Reality*, 1927-28. Cambridge edition 1929, (A.N. ホワイトヘッド著 山本誠作訳「過程と実在(下)」著作集第11巻 松籟社 1984年 p.49.)
- (4) 同訳書 著作集 第11巻 p.612
- (5) 同書 p.614
- (6) 同書 p.615
- (7) 同書「過程と実在(上)」著作集 第10巻 p.135
- (8) 同書 p.157
- (9) 同書 p.168
- (10) 山田廣成著「量子力学が明らかにする存在, 意志, 生命の意味」光子研出版 2014(第2版) pp.38-39
- (11) 佐藤文隆著『量子力学は世界を記述できるか』青土社 2011
- (12) 上掲書 p.74
- (13) 同書 pp.85-87
- (14) 同書 p.90
- (15) 同書 p.91
- (16) 同書 p.92
- (17) 拙稿「個人の存在価値への帰還と有機的世界観の福祉的解明」聖学院大学論叢 31巻2号 2019に おける「現実的実在」に関係する事項を参照されたい。特に p.87, p.91, pp.93-94
- (18) 前掲訳書「過程と実在(上)」p.30
- (19) Wilber, ken(ed.), *The Holographic Paradigm and Other Paradoxes*, Shambhala, 1982, (K. ウィルバー編集 井上忠他訳「空像としての世界—ホログラムとしての世界」青土社 1984年, pp.268-269)
- (20) 同書 pp.271-273
- (21) 前掲書 Whitehead, A.N., *Process and Reality*, (山本誠作訳「過程と実在(上)」著作集第10巻 p.89)
- (22) 前掲書『量子力学は世界を記述できるか』p.116
- (23) 上掲書「過程と実在(上)」p.60
- (24) 同書 pp.60-61
- (25) この「連続」と「生成」に関する議論については、第Ⅱ部の註50でも触れているが、ここでも 論の読み解きの為に註書きを入れておく。連続の生成とは、抱握論を介在させることによって理解 できる。連続は神による我有化・占有化という抱握作用のなかに存立する作用内容であり、その連 続の生成はそれに内包されて存続する態様そのものである。したがって内なる生成とは連続態様の 延長性そのものである。しかし、特定化される状況対応的生成は、そのミクロ静態の限界性のなか でマクロ動態においては終息していく。それは連続のなかに吸収されてゆく。
- (26) 同書 pp.87-88
- (27) ホワイトヘッドはこの両極論の基底に「現実的実在」論を位置づける。「一つの面には、単純な 因果的感じの成立が在り、他の面には、概念的感じの成立が在る」。これら二面は「現実的実在の 物的極ならびに心的極」とされる。「いずれかの極を欠く現実的実在は存在しない」。したがって「現 実的実在は」「本質的に両極的である」。(前掲訳書「過程と実在(下)」p.436)。両極の両立論とし ての議論の詳細については、拙稿「人間福祉学における『プロセス哲学』の意味と可能性 part 1」 聖学院大学論叢第29巻第1号 2016 pp.133-136を参照されたい。
- (28) 前掲書『量子力学は世界を記述できるか』pp.128-130
- (29) 関連記述については、これまでに触れてきたが、あえてホワイトヘッドに沿って、ここに少し 触れることにより、理解の深まりを期しておきたい。彼は統合について次のようにいう。「諸抱握」 が「相互的な発生的関係のうちに」示されていくなかで、「現実的実在(質)」は「相から相への成長」 の「統合から再統合の過程」を辿り、「主体的形式の複合的統一性」の感じに至る。この主体的統 一性が「この過程を支配する」。こうして「合成」の「支配」がなされていくが、そこでは「全体

としての量子の現実化」が問題となる。ホワイトヘッドは「この量子」を「神から原生的に派生する主体的思考に諧和しているところの延長的連続体におけるその立脚点である」としている。そうしてその量子の要素とされる現実的実在が、その作用としての愛による統合性であり全ての根底となる。そこには内に「個的な自己実現を伴った要素」の「諸多性の統一性」が神の結果的本性としてある。われわれはその統合的内抱に愛と許しを見出すことが出来る。前掲同書「過程と実在(下)」 pp.509-510, p.620, 及び p.624

- (30) 佐藤文隆, 井元信之, 尾関章『量子の新時代』Asahi 新書 2009 pp.206-207
- (31) 同書 p.208
- (32) Al-khalili, Jim & McFadden, Johnoe, Life of the Edge, 2014 (アルカリリーリ, Jim 及びマクファデン, Johnjo 著 水谷淳訳「量子力学で生命の謎を解く」, SB クリエイティブ, 2015, pp.268-269)
- (33) 同訳書 pp.280-293
- (34) 前掲同書「量子力学が明らかにする存在, 意志, 生命の意味」光子研出版 2014 (第2版)
- (35) Schneier, Bruce, Data and Goliath, The Hidden Battles to Collect your data and contro; your world, W.W. Norton & Company, 2015, (B. シュナイアー著 池村千秋訳「超監視社会」草思社 2016 p.50)
- (36) 上掲訳書「量子力学で生命の謎を解く」において「酵素は生命のエンジェルとして地球上のすべての静物のなかの全ての分子を作ってきた」等啓発的の把握が見られる。p.346
- (37) 上掲書「量子力学で生命の謎を解く」 pp.347-348
- (38) 同書 pp.345-348
- (39) 牛津信忠著『社会福祉における相互的人格主義 1』久美出版 2008 pp.142-143。ここにおける生活構造の構造要因の原型については, 青井和夫, 松原治郎, 副田義也編著『生活構造の理論』有斐閣 1971 pp.116-117 を参照している。
- (40) 拙稿「自我論と人格主体論の現象学的再考 第Ⅲ部 (2)」聖学院大学論叢第 27 巻 第 2 号 2015 第 10 章及び結章。
- (41) Chapin, Rosemary K., *Social Policy for Effective Practice, : A Strengths Approach*, Routedge, 2011. 及び上掲論文, p.103
- (42) *ibid.* p.13
- (43) Scheler, Max, 1927: *Der Formalismus in der Ethik und die Materiale Wertethik*, Neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus, 3. Verlag, Halle a. d. S.1913-16, [Formalism in Ethics and Non-Formal Ethics of Values, A New Attempt toward the Foundation of an Ethical Personalism, translated by Manfred S.Frings and Roger L.Funk, Northwestern University Press,1973], (M. シェラー著 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編 吉沢伝三郎・岡田紀子訳『倫理学における形式主義と実質的価値論理学 (中)』(シェラー著作集 2) 白水社 2002 pp.287-288)

The development of a scientific religion for the study of human welfare : welfare situated in the axial core Part I

Nobutada USHIZU

Abstract

This study initially posits some general religious arguments; comparing religion with scientific viewpoints. A reinterpretation of the concepts of religion is then attempted, to posit the idea of a scientific religion that can be organically connected to the latest scientific discoveries. Focusing on such a religion, this study endeavors to discover steps that can be taken to create guidelines for infinite possibilities being considered as a given in arguments for human welfare. Whitehead's organic philosophy of religious ideas informs the development of the present study's theories.

Key words: scientific religion, vector, actual entity, prehension, life structure